6月4日

20L406014　大野紗英

「中国国民党と共産党の成立と展開」嵯峨　隆

(『岩波講座　東アジア近現代通史　第4巻　社会主義とナショナリズム　1920年代』

岩波書店　2011年　山口昭男　p162-180）

１．関心

　中国国民党と中国共産党の成立や関わりについて、また国共合作などの政治運動を通じて1920年代当時の中国の政治情勢がどのように遷移したかについて理解を深めるため、本著を選択した。

２．要約

1920年代の中国政治は「善悪二分論」で語られる傾向にあったが、近年その傾向は弱まり客観的な研究がされるようになってきた。国民党が内的自己発展を遂げたのに対し共産党は外部からの影響が大きく、成立の経緯は対照的である。国共合作の当初は国民会議運動が高揚したが、孫文の死後党内で分裂傾向が見られ始め、蒋介石が政権を握ると武漢と南昌での対立が起きた。蒋介石のクーデタの後、共産党の労務運動に危機感を覚えた武漢政府の国民党員も次第に反共化し、汪精衛が共産党との分裂を宣言し国共合作は崩壊した。国民党は南京で再統一され、蒋介石が復職し北伐が再開、中国統一が実現し「以党治国」が確立された。（296字）

３．はじめに

・本稿は、1920年代以降の中国国民党と共産党の成立と展開について論じるものである。

・当時の中国では思想的な是非を別として「共産主義」を如何に活用するかが鍵となったため、かつての革命中心史観においては毛沢東路線が基準となる「善悪二分論」で語られる傾向にあった。

・1970年代以降その傾向は弱まり、1980年代には民国史観が定着したことで客観的な研究がなされるようになったが、それは同時に共産党の単なる「党史」研究への関心を弱めることになった。

・中国の研究では、日本と同様に実証研究の面では革命中心史観からの脱却が進むと共に、かつての通説の誤りを正し、不明確であった部分の補強を行うため新たな史料が利用されている。

４．本論

中国国民党と共産党の成立

　・20世紀中国では中国国民党と共産党に共通して、武力による政治闘争が行われており、その起源は民国初年の政治状況にあったと述べている。

　・中国国民党の起源である基礎思想を生み出した孫文が公開政党である国民党解散の後、秘密団体の中華革命党を成立させ、同党が中国国民党と改称した後までのことを、各党の体質と問題点について触れながら述べ、孫文の思惑について論じている。

　・共産党の成立は内的自己発展を遂げた国民党と対照的であると論じ、ロシア革命という外部からの衝撃による影響が大きいことやコミンテルンなどの外部勢力の支援を受けたことなどの論拠を示しながら第一回党大会までの共産党の軌跡について述べており、また当時の共産党の方向性がコミンテルンの路線と違うことを資料を基に論じている。

国共合作の形成

　・コミンテルンが共産主義者を組織化する一方、親ソヴィエト勢力拡大のためその他政治勢力との接触にも意欲的だったことをコミンテルン代表のマーリンと孫文の会見を取り上げて述べており、また孫文側もコミンテルンとの関係を構築することが必要であったと述べている。

　・中国での最重要課題が民国の統一と国家の統一であると確認する「孫文・ヨッフェ共同宣言」が連ソ政策に基づく国民党改組の出発点となったと論じ、コミンテルンが国共合作を強く求めたことによる国共合作に向けての共産党内の議論の内容、国民党の大規模な組織改革の内容を述べている。

　・孫文への集権、国民革命軍の根幹となる「党軍」の設立を取り上げ、ソ連共産党をモデルに再編された後の国民党の特徴と成果を述べている。

国民革命の展開

　・国民会議は陳独秀の「中国の大患」によって初めて提示されたが、孫文は当初これに意欲的でなく、馮玉祥のクーデタと孫文の北上要請により情勢が急変したことで注目を浴びるようになり、結果的に国民会議運動の高揚が孫文の意図を大きく上回ることとなった。

　・孫文の死が国共合作期の大きな転機となったとし、総理の地位の廃止と中央執行委員会制度の採用など体制的な変化に触れつつ、国民党内の反共右派が活発化し西山会議が問題となったことを述べ、汪精衛が共産党と蒋介石のバランスを取りながら党運営をしなければなかったこと、蒋介石の強い反共意識の原因について論じている。

　・中山艦事件の結果、汪精衛がフランスへ外遊し蒋介石が政権を握ることとなり共産党員への制限が強くなったものの、国民党全体としては「容共」ではなく「連共」と捉える傾向が強まった結果、その後の北伐により成立した武漢政府では共産党と国民党左派の人々が政権の中心となった。

・蒋介石が南昌に国民党と国民党中央党本部を置いたことで武漢と南昌の対立が明確化し、武漢で開催された国民党二期三中全会で決定された国民革命軍総司令の地位廃止、汪精衛の外遊先からの帰国と上海での国共合作継続を確認する声明の発表により、蒋介石の権力を抑制する動きが見られたと述べている。

・漢口と九江における租界の回収、共産党指導下の労働者の武装蜂起、南京事件などにより共産党の取り締まり、反共行動が各所から要請されるようになったことを背景に蔣介石が上海でクーデタをおこし南京に国民政府を樹立したが、その後武漢政府における国民革命軍の軍人たちも労農運動の行き過ぎに相継いで危機感を覚えはじめ、共産党が武漢政府から党員を退出させることを明らかにすると、汪精衛らも共産党との分裂を宣言し国共合作が崩壊した。

　・武漢政府の反共化により国民党は南京で再統一され、蒋介石が復職の後政・軍両面での権力を握り、北伐が再開されると途中日本軍との衝突はあったものの、北京を占領し張作霖を追放して北伐を完成させ、蒋介石の国民党による全国統一が実現し軍政から訓政への移行により「以党治国」が実現したが、国民党内の軍事指導者との妥協によるものであった点や、武装暴動路線へ転じた共産党の存在など問題を抱えており、また農村根拠地を樹立した毛沢東らも後に国民政府への挑戦者となると述べられている。

５．おわりに

・1920年代の中国政治は国民党と共産党の合作の遷移によって特徴づけられており、前半は孫文の指導力により、最終的には党・軍を掌握した蒋介石により、「共産主義」の活用の成果として中国統一は実現され、「以党治国」の制度的な確定がなされた。

　・1928年10月に発せられた、「治権」とともに本来国民が有する「政権」を当面の間は党に付託するという「訓政綱領」は「党国体制」の歴史的出発点だが、訓政解釈については国民党内外から異議が唱えられており、それらは斥けられたとしても思想的営為が改めて今日評価されている。

５．批評

　・蒋介石の国民党による中国統一を孫文以来の「共産主義」の活用の成果であると述べられていたが、蒋介石は元々反共的な立場であり、それにより下野させられていたこともあると考えると復職後さらに権力を握ったとはいえ、蒋介石自身はむしろ共産党と汪精衛ら国民党左派に振り回されていたように思える。

　・国民党の展開については詳細に書かれていると感じたが、共産党が武漢政府を退出した後の動向については部分的にしか書かれていないように感じた。

６．関連書籍

・深町英夫（2023）「規則を「守る」か「破る」か「作る」か：初期中国国民党・中国共産党の世界観」『東アジア近代史/東アジア近代史学会編』東京：ゆまに書店　2023年6月

　・北村稔『第一次国共合作の研究：現代中国を形成した二大勢力の出現』岩波書店　1998年4月

　・北村稔『現代中国を形成した二大政党：国民党と共産党はなぜ歴史の主役になったのか』ウェッジ　2011年8月

　・西島栄（2016）「トロツキー　中国共産党と国民党」『トロツキー研究=Trotsky studies/トロツキー研究所編』福生：トロツキー研究所

　・判沢純太「第一次国共合作期におけるコミンテルンの対中国共産党革命指導の蹉跌」『政治経済史学=The journal of historical studies : the politico-economic history/政治経済史学会編』町田：日本経済史学研究所 1983年7月